

九州の電源 どうする 再生エネ

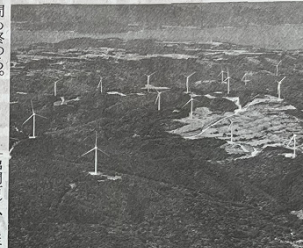
(下)

九州電力グループが陸上、洋上で風力発電所の開発をベースアップしている。九州は風の面で適地が多いとされるものの、新規の整備には用地環境への影響、技術などで課題も多い。同グループが掲げる再生可能エネルギーの「主力電源化」を実現するには、風力のポテンシャルを生かし、再生エネのEESに育てることができるかが問われる。

海に開かれ、年間を通して安定した風が吹くことから「風岬」と呼ばれる鹿児島県の長島。標高2001.400mの山並みに、30階建てビルに相当する高さ116mの風車が21基林立し、巨大な白いブレード（羽根）が回っている。

風力発電 EESになるか

九電、陸・海で開発加速



大型風車が林立する長島風力発電所（2008年、鹿児島県長島町）＝長島ウインドヒル提供

九州電力グループの主な風力発電所	
唐津・鎮西ウインドファーム	北九州臨海洋上ウインドファーム(建設中)
2万7200キロワット(8基)	出力 22万キロワット(25基)
長島風力発電所	串間風力発電所
5万400キロワット(21基)	6万4800キロワット(23基)

トのような大きな部品を運ぶための港や道路も必要となる。

だが、発電所を運営する長島ウインドヒルの右崎浩取締役所長は「建設老朽化などの問題はなげに大規模な発電所の運転できるのではない」と話す。

九電グループで再生エネ電源の開発・運営を手がける九電みらいエナジ（福岡）は「太陽光パネルの適地も減るなか、風力発電は開発ポテンシャルが最も高い電源と位置づけている。現在、九電グループが九州で運用している風力発電所は6カ所、20年に串間風力発電所（出力6万4800キロワット、宮崎県

10月の運転開始から間もなく15年になる。風力発電所の寿命は一般的に20年程度といわれ、29年3月には固定価格買取取り制度（FIT）の対象期間も終わる。

串間市、21年に唐津・鎮西ウインドファーム（同2万7200キロワット、佐賀県唐津市）と立て続けに大規模な発電所の運転を開始した。

22年度に九電が供給した電力に占める風力発電の割合は、他の事業者からFITで買取った分を含んでも約1%にとどまる。現状では太陽光の割合とは大きく開きがある。

風力発電の適地は年間の平均風速が毎秒6m以上とされ、多くが沿岸部や山地に集中する。実際の開発には周辺への騒音や野鳥への影響などを考慮する必要がある。プレ

合わせた九電グループの再生エネの開発量（出力ベース）は22年9月末時点約255万キロワット。このうち水力が51%、地熱が2%を占め、バイオマス16%、風力8%、太陽光4%と続く。自前の電源としては、すでに風力が太陽光を上回っている。

九電グループは再生エネの主力電源化に向けて、30年には再生エネの開発量を22年より96%増の500万キロワットにする目標を公表しており、開発ポテンシャルの高い電源として風力、太陽光、地熱を挙げている。

目標の達成には、陸上洋上を問わず風力発電の大幅な増強が不可欠と見られる。（兼好平）

日本経済新聞
2023年9月27日